

黄泉語り

藤野秀樹

よう来んさった、旅の人じゃろ。
どこから、来らりようたか。
お参りか、それとも、ホトケ降ろしか。
梵妻たら者では、ありやあせん。
昔から、この寺におる者じゃ。
まあ、こげな婆になりもうした。
そこらにおる猫は、気にせんといて、つかあさい。
この寺、猫がぎょうさんおりましての。
こんにら、指が六本ありましよう。
長いこと、身内ば番うて参つたで、血が濃いのです。
そう言われて、辺りを見まわしても、猫などいない。
気色の悪い婆だ。
妙な話が聞きたいなら、藤ヶ谷へ行けと言われた。

荒れ寺に、化け物みたいな婆が、棲みついているのだと。
宿の女将に、誑かされたか。
焼け落ちた本堂の跡には、瓦礫が、堆く積み上げられていた。
干上がった池の傍、朽ちた藤棚から、枯れた花房が垂れ下がっている。
焼け残った庫裡の薄暗い土間、火のない囲炉裏端に、その婆はいた。
根太の弛んだ古畳に腰下ろし、夜鷹でもあるまいに、吹流しに被った手拭いの端、銜え
ている。

婆の前には、明かりの消えた回り灯籠、横顔が薄闇に溶け込む。
土間の隅に積み上げられた、何体もの黒焦げの仏像。
焼け爛れ、手足の千切れた姿は、人の死骸を思わせる。
辺りに、湿った香木の匂い、漂っていた。
この婆、ご面相は知れないが、長年、経でも上げたか、物売りのような嘎れ声だ。
よく見れば、年甲斐もなく、縮緬の振り袖を着ている。
薄闇の中、垢で汚れた袖口からのぞく手が、仄白く揺れていた。
ちようど、膝の上の猫を、撫でる仕草だ。

ここいら、藤ヶ谷いいましての。
きれいな藤の花、咲きようります。
里の人ら、藤の花、目印に、山道伝おて、この寺まで来んさる。
池の傍の祠、弁天堂ちゆうたかの。
白茶けた蛇の細工物が、御本尊じゃ。
水面に映る藤の房、風に揺らいで凜と鳴りようる。

この季節、花の音、姦しゆうての。
何でじゃろう、わしの耳には、よう聞こえる。

他の人には、聞こえんのか。

家の者、おかしゆうなりましょう。

昔は、土蔵に閉じこめたものです。

わしも長いこと土蔵におりましたの。

土蔵の窓、高いとこにありましょう。

狭い窓から、日が射します。

外はよう見えんのです。

人の気配すると、大声あげたり、すすり泣いたり、甘えた声、掛けたりしましての。

気を引こうとしたものです。

じゃけえ、あんまり騒々しゆうしますとな、罰じゃ言うて、土蔵の窓、閉めようります。

何より、暗い中、一人でいるのが怖い。

何でか知らん、この寺に預けられましたの。

思いだせんくらい昔から、ここにおるんです。

この寺、都追われた落人が、願掛け建てた寺での。

名前は成就院いいます。

願い叶わず、ご利益もなし。

けたくそ悪い寺でなあ。

院主さんにしてから、勝手に住み着いた山伏じゃと聞きました。

お布施も集まらんと、困り果てた坊主の浅知恵。

蔵の奥から、虫喰いだらけの曼陀羅引き出し、薄暗い本堂ん中、百匁蠟燭とぼしまして

の。

散杖で曼陀羅指し示し、語り聞かせる絵解き説法。

埒もない因果ばなしで、子ども怖がらせとりました。

まずは、かんじいざあいぼさあ、まあかさあ。

ありがたや、ごりやく、さんじゆうと、みとお、ありもうす。

おん、あろりぎや、そわか。

これなる、まんだら、てんじくより、つたわりし、みるもの、さんじゆうと、みとお、

おのれが、じゆくをあらわす。

ぐぜい、じんによかい。

りやつこう、ふしぎ。

これに示すは、ろくどう、さんまくしゆのことわり。

じゃによつて、まんだらの中、あんたら、なにが、みえんさるかの。

昔は、寺も神社もいっしょくたでろう。

院主さんと神主さん、二人おられた。

たいがい、わしには人の顔、よう見分けつかん。

寺の坊さん、おおぜいおられたが、院主さんだけ、紫の着物きとつた。

神主さんも、烏帽子かぶとつたけえ、わかりもうした。

じゃけど、院主さんと神主さん、同じ人だったような気がします。

その頃、わしも赤い袴に白衣着て、巫女のお勤めしよりました。

ませた口きく、カミ懸かりするか。

ホトケ降ろしの、姫子にしちやろか、言われましての。

白いもの、着る身となりもうした。
この寺、はつびやくらかん、言うんかのう。
石の仏さん、ぎょうさん、あります。
仏さんの首、そこらに、ごろごろ落ちとりましよう。
昔、排仏騒動ありましての。
里の衆、おおぜい来りました。
こんにら、何しようなら思うたら、鉄の槌で仏さんの首、叩き落としようた。
坊さん、みな逃げてしもうておらん。
あげくに、本堂の仏さん積み上げ、燃やしうた。
そがあな事したら罰あたる。
わかりきったことじゃが。
大風吹いた晩、里で火い出ましての。
里の人、ようけい死にようりました。
ええ気味じゃ。

この寺、観音行場呼ばれとりましての。
裏山の崖くり貫いた岩窟に籠もり、数珠もみながら拝みうた。
ご本地は、千手観音じゃけえ。
千の眼もて、見出したる。
千の手もて、救いたる。
おん、ばざら、たらま、きりーく。
この岩窟と申すが、古の墓じゃ。

蜂巢の如く穴多ければ、藤ヶ谷の百穴、呼ばれとります。
どぶ臭い獣、血の匂い、漂うとろう。
死んだ者、岩窟に引き寄せられるんじゃ。
ここから、あの世に昇りようります。
幾重にも折り重なりし死者の臥所、御霊の溜まり、一夜過ぎさば、ホトケの夢見る。
憑坐なして、墮ちそこないのホトケに口貸すが、わしの生業じゃ。
わしの頭ん中、おおぜい人がおりましての。
話し声、よう聞こえもうす。
そんいらの声、口移しに伝えるだけじゃが。
岩窟の底さらえば、割れた土器、砕けた骨、出ようります。
喉仏の骨、拾いますじゃろ。
嘘をつくほど、骨が綺麗じゃ言います。
亡者の骨節、三百と六十四節なり。
亡者の骨肉、骨節に、大威力の風吹かば、その身、微塵に切り裂かれん。
集めた喉仏、狼の牙、数珠にぶらさげ、首から吊し、ご祈祷しようりました。
形の良い鬮褰みつけては、金箔貼りつけ、杯つくり、毒虫漬けこんだ酒あおる。
仏さん、干涸らびた饅頭、供えてありましよう。
あれ、喰うたらいけん。
あの世のもの、喰うたら、しまいじゃ。
あの世の人になりようる。
わし、何ちゅう名じゃったか。
ここの水、飲みようたら、名前も忘れてしもうた。

自分のこと、憶えとらんくせに、ホトケの事、よう思い出す。いちど憑いたホトケ、呼びもせんのに、何遍も来ようります。憑いた死霊、後で祓うて、人形に封じますがの。長いこと、ホトケ降ろし、やつとりましよう。躰ん中、穢れ落ちんで、澱が溜まるんじや。こここの池、祓いの人形、ぎょうさん捨てようたけえ、念が凝つとろう。

盆になると、男衆、死んだ女房のホトケ降ろしじや言うて、来ようります。口寄せ、終わつたあと、言うたるんじや。いちど降りたホトケ、一晚、わしの中に滞まる。通夜送りして、あんじよう供養しんさい、ちゆうての。通夜送りいうのが、わしらの、まことの商売じやけえ。日も暮れて、忍んできた男相手、岩窟の臥所でいたすのじや。わしに憑いた、どこぞの死霊が、ごろごろ喉を鳴らしよる。あんたが、恋しいちゆうて、泣いたるんじや。ええ金、取れるでえ。女房の命日、どおでもええんじや。わし目当てに、ヘタれ魔羅の爺まで、ようけい来ようた。わしやあのう、この寺の猫みとおに構合とりました。里の男の魔羅、全部知つとりますで。畜生道に墮ちようて子を成し、土蔵に閉じこめらりようた。その子、どしたか知らん。

父親の顔も思い出せん。門前の四辻にや、流れた赤子が埋まつとります。喰うにも困る、こがあな寺で、あんた、ええとこ、来んさつた。ホトケ、降ろして欲しいか。願い主、望むホトケ降りるたあ、限りませんで。死霊ら、身勝手なもんよの。生きとる時のこと、何も憶えとりやあせん。死んで、迷うて、獣になつとる。腹へらして、飢えたみとくに、貪るだけじや。人の心、剥ぎとられ、餓鬼ちゆうもんになつとる。まだ、畜生の方がましよの。死人ら、生きとる者の御霊、狙おとる。生き肝、喰いちぎつて、逃げるつもりよ。泥棒猫みとうな、奴らじや。この寺、猫がぎょうさん居りましよう。ほんま言うたら、この寺の猫、迷うた死霊じやが。六本指なんは、そのせいか。死口、寄せるときやあ、何が憑くかわからん。お前さまは、死人降ろすか、カミを降ろすか。ホトケ降ろしは、やめときんさい。恐ろしげな、ことになる。なんでか、言うて、聞かせちやろ。

しばらく、前のことじゃ。
通りすがりの旅の衆、来ようりました。
里で、聞いて来たんじやろ。
宿の女将と院主さん、連んどつての。
旅の衆よこしたら、女将に銭渡しとつた。

ちようど、五月の頃じゃ。
昼時に、えらい大雨、降りようてな。
雨上がつたら、夏みとおに、日が照つての。
えろう、暑うなりもうした。

お山、藤の花、盛りでの。
谷底から、熱が昇つて、蒸せかえるようじゃ。
そんな時、陽炎立ちようた。

陽炎ちゆうたら、不思議なもんよの。
揺れる景色、見とつたら、中から女が出て来た。
黄八丈に鳥追い笠、三味線抱えとる。

その女、この世のものでない。
どごぞの死人が、迷うたか。
ホトケ見たくば、こがあにして、目え窄めるんじやが。
陽炎、ひと揺れする間に、女の姿、消えとつた。
女の消えた辺り、こんどは、三味線背負うた男、現れようた。
ホトケ降ろすまでもない。

死霊連れて来ようた。

その男、弦蔵ちゆうての。
三味線抱えて世間を渡る、門付けじやが。
目え見えんのか、キクたらいう小女衆に、手え引かれとつた。

この兎、左の脛、縫い合わされ、頬に引きつれ走つとる。
何の因果か、眼玉の腐る病でも患ろうたか。
キクの心、覗こうとしたが、暗い澱み、何も見えん。

何かに憑かれとるんか。
チヨいう女を、供養してつかあさい、弦蔵が言いようた。
長いこと、一緒に旅回りしとつた女でう。

風呂敷解いて、繻子に包んだ白木の位牌、取り出した。
チヨの供養じやいうて、本堂の須弥壇、位牌置きましての。
院主さん、お経上げようりました。

坊さん、経上げて、極楽行きようたら、何も苦労がない。
わしらの降ろすホトケ、あの世に行けず、そこいらに迷うとる。
供養終えた帰りがけ、弦蔵が言いようた。

宿で聞いて来たんじやが、ホトケ降ろし、願いたい。
死霊ちゆうのは、禍いなすことある、ええんかの。
ええけえ、降ろして、つかあさい。

キクに手え引かせ、裏山に弦蔵、連れてつた。
注連縄張つた穴くぐり、岩窟の中、湿つた筵に腰下ろす。

わしの傍、弦蔵座らせ、キクが後ろに控えとった。
誰を、降ろすんじや。

三味線抱えた、鳥追い笠の女じやろう。

一緒に旅しとった女か。

あんたら連れとったホトケが、チヨやないんか。

いんや、チヨは、もう成仏しとりましよう。

去年の春、彼岸の旅回りで、ヤエいう女に会った。

女衞に連れられ、廓に売られるところじや。

一緒に逃げると約束した。

人買い殺して、連れて逃げるつもりじやった。

葛の橋があつての、下に落としゃあ、誰も、よう生きとらん。

そこで、待ちようだが、女は来なんだ。

その女、降ろして、つかあさい。

そんなに、死んだんかの。

わからん、どないしたか、知らんのです。

蠟燭一本灯して、燃え尽きるまでのお勤めじや。

鉦を鳴らして、数珠繰りながら、ご真言唱えた。

蠟燭の煤、よう目に沁みる。

牀中、燃えるように熱うなる。

苦しゅうて、息もできん。

俯いた拍子に、死霊、憑きようた。

わしの背中に、重いもの、被さる。

そいつが、背中、喰い破りようる。

皮膚の下、ずるりと潜り込み、背中から胸、胸から腹、這いまわる。

ふいに、ホトケの名前、わかった。

女郎あがりの、ヤエちゆう女じや。

白粉の匂い染みついた、郭者じや。

このホトケ、何ぞ、たくらんどる。

迷うた女のするこつちや。

弦蔵の御霊、喰らう気じやろ。

胸から喉首伝わり、わしの口からヤエの声、飛び出しようた。

弦蔵さあ。

あんたあ、どこにおるんね。

うちら、あんたの後ついて、行きようたんよ。

甚八たら人買い、足悪うて、ろくに歩けませんが、うるさいこと言いよる。

うち、九つの時、廓へ売られたんよ。

廓づとめは、慣れとる。

しばらく、妾暮らしをしようたが、旦那に死なれて、廓に戻るどころよ。

じゃがねえ、甚八に連れられて行くうち、気が変わった。

うちも年よね。

廓づとめ、ようつづけん。

あんたの言うとった、吊り橋まで来たら、なしてか知らん、魔が差したんよ。

甚八の頭、石で叩き割ったつた。

あんたが、そばに居りゃあ、逃げる気にもなったがね。
もう何もいらん。
逃げるのも、大儀なつた。
それで、橋から飛び降りたんよね。

荒れ寺の庫裡、仄暗い炬端で、婆が囁く。
煤けた手拭い、端を銜えて吹流しに被り、気色の悪い声色づかい。
色褪せた縮緬の振り袖、垢染みた袖口から覗く白い手ゆらして、差し招く。
声かけられて、目を剥いた。
白粉の匂い、辺りに漂い、いつの間にやら婆の姿、艶気のある遊女に変わっている。
これが、ヤエという女か。

婆の中の死霊が誘う。
哀れな声出して、俺を誘う。
滅相もねえ。
この俺までも、誑かされたか。

ホトケの邪気に惑わされ、わしのこと、よほど、ええ女に見えるんじやろ。
弦蔵、わしに抱きつきようた。
わしの衿もと、押し開き、首筋に吸いつく。
弦蔵の舌、わしの喉、ねぶりまわしようる。
わしも、男の躰、しがみつく。
男のもの掴み、わしの中、入れたつた。

わしの中で、男のもの、どくどく波打ちようる。
血を吸うた蛭みとうに、膨れ上がつとる。
男くわえて、嬉しいんじやろ。
ヤエたら女、盛りついて、暴れよる。
男の腰、脚で挟んで締めつけたつた。
締め上げて、男の精、吸い出すんよの。
腐った桃の匂いを嗅いだ。
実をもぐ者も、おらんで、腐って落ちた桃の実じや。
甘い汁吸うて、糞虫、狂うたように暴れよる。
男の舌、根元までくわえて、吸うたつた。
喉の奥、わしの舌と、絡みあう。
男の膨れ上がった舌、わしの喉、塞ぎようた。
男も苦しゅうて、喘いどる。
もう、よう逃げんじやろ。
わしを振り解こうと、男が暴れよる。
男に絡みついたまま、男の舌、噛み切つた。
吹き出した血が、わしの口から溢れ出る。
血を吸うて、筵が赤く染まっっていく。
飢えた死霊が、わしの中で騒ぎようる。

そんな時、手引きの小女衆、すくつと立ちようた。
覆い被さつた男の躰越しに、キクの顔が見える。

今まで、どこにおったんじやろ。

岩窟の闇に、隠れとったか。

キクが、燭台つかんで、振り上げた。

湿った筵の上、落ちた蠟燭、火が消える。

暗闇の中、燭台振り下ろす風音と、骨の碎ける音が聞こえた。

男の碎けた頭蓋から、溢れた脳みそ、わしの顔に飛び散る。

胸の奥から、喉を伝うて、熱いもの、迫り上がってきようた。

喉から、鼻孔を伝うて、目玉の裏側まで、熱いかたまり、膨れ上がる。

わしの牀から、ヤエが、抜け出そうとしよる。

抜け出して、男に喰いつくつもりじやろ。

男の牀、びくびく痙攣しようた。

キクが、わしの顔、覗き込む。

ゆっくりと、燭台持ち上げ、仰向けに寝とるわしの額、かち割りようた。

割れた額から、吹き出した血が、男の血と混じり合う。

たちまち、大きな血溜まり、広がっていく。

死んだ男に抱きしめられ、血溜まりの中、浸かっとうた。

見開いた男の目、何も見えとらん。

血の滴る、燭台を持ったキク、喘ぎながら、突っ立っとうた。

そのうち、ぱたりと、倒れようた。

そこまで見届けたところで、わしも死にようりました。

わしが、この世の見納めは、弦蔵の灰色の瞳じやった。

キクが、わしらの頭、碎いた力、尋常やない。

死人が憑いて、操ったんじやろ。

あのチヨたらいうホトケ、キクに憑いて、弦蔵と旅しとったんかの。

あの男の御霊、チヨが銜えて去んだか。

この岩窟、あの世に通じとる。

中を吹きようる風、黄泉風言いよります。

あんなら、黄泉風吹きようて、あの世へ、飛ばされたんじやろ。

いまごろ、六道四聖のどのへんに、おるんかの。

わしと、弦蔵の死骸、血溜まりの中、転がっとうる。

蜂の巣みとうな穴の中、骨になりようても、抱き合うとるんか。

風の強い日、どこぞ奥の方で、わしらの骨、カタカタ鳴りようります。

行き場無うなつて、わし、キクに憑いたんじや。

憑いてみて、気づいた。

この兎、わしによう似とる。

大方、土蔵の中、閉じ込められとったくちじやろ。

頭ん中、からっぽで、わしの気が、すっぽり嵌まりようた。

あの、ヤエたら女、何処へ行きようたか。

岩窟の奥にでも、隠れとるんか。

死霊には、災いなすもの、おりましての。

じゃけえ、言うたがの、ホトケ降ろしは、やめたがええ。

語り終えた婆、袂から燐寸、取り出す。

湿気った青火で、灯火とぼした。

回り灯籠、影絵となつて、赤い灯、青い灯、辺りに映る。

奇異なこつちやのう。

また、こないな小女衆から、やりなおすんか。

旦那はん、わしのこと、買うてくれんか。

躰は小まいが、あの方は、よう心得とるけえ。

紅蓮に燃える灯籠の灯、白い首筋を照らす。

くわえた手拭い、はらりと捲れ、頬に引きつれのある子供、にたりと笑つた。

(了)

「季刊・遠近」43号より転載

(大野注……二〇一〇年一〇月二六日、二三時二九分に脱稿)